**珠洲焼資料館**

*(250 words sign at entrance to museum)*

珠洲焼は、能登半島の先端で作られる素焼きです。独特な暗い灰色をしており、これは焼き方に由来します。珠洲では、12世紀半ばから15世紀末まで焼物が作られていましたが、その後、完全に姿を消してしまいました。

*古来の技法と影響*

 珠洲焼の器は、鉄分の豊富な地元の粘土を巻いたものを使って作ります。この粘土を叩いてならし、望む形にします。珠洲焼の器は高温 (1,200℃を上回る高温) で焼かれます。これにより、木の灰が粘土の表面に付着し、釉薬のような繊細な光沢ができます。

 この技法は、日本に5世紀にやってきた朝鮮半島の須恵器に由来しています。初期の珠洲焼の形と装飾の様式は、現在の愛知県にある瀬戸や常滑で作られた焼物から影響を受けていました。瀬戸や常滑は、12世紀には日本で最大級の焼物の産地でした。

*便利な交易路*

 重くて壊れやすい陶磁器を流通させるには、船で運ぶのが最も便利な方法でした。能登半島は、北海道と福井県の間の日本海の通商航路に位置しており、流通にとって理想的でした。珠洲焼は、14世紀半ばまでに、日本の1/4を超える地域で売買されることになりました。

*突然の衰退*

 15世紀後半に珠洲焼は衰退し、製造は止まりました。その正確な理由は不明ですが、越前 (福井県)、常滑 (愛知県)、備前 (岡山県) といった、他の生産中心地の生産性と流通が改善した結果かもしれません。

*珠洲焼の再発見*

 珠洲の独特な焼物は、1951年にひとつの骨壺が発掘されるまで、ほぼ忘れられていました。さらなる発掘により、珠洲周辺で40の窯が発見されました。1972年、陶芸家の小野寺玄 (1934～2016年) は、珠洲焼作りの伝統的な方法をよみがえらせるために、珠洲の粘土で実験を始めました。現在、能登半島で珠洲焼を作っている陶芸家は、約40名います。

 この資料館の所蔵品には、12世紀から15世紀までの珠洲焼の例とともに、現代の作品が含まれています。